ゆく雲

秋聲　徳田末雄

一

「何者君は然う、急に政治が面白くなつたのだらう。」

と言つたのは、白皙人のと思はれる綺麗な、趣味をもつた口髭の、三十有餘の男であつた。

「圓卓子の上には、大きな薩摩燒の花瓶に活け

ゆく雲

秋聲　徳田末雄

一

「何者君は然う、急に政治が可厭になつたのだらう。」

と言つたのは、白皙人かと思はれる綺麗な、繻子の頭巾帽子のふちには、大な薩摩燒の花瓶に伝と牡丹花が挿されて、捲いた紐の窓帷の窓から

時半頃の日が斜に、壁間の黨の主領の肖像畫を照して、おるが、彼等は長方形の草[illegible]を囲んで、草を者に、手やにゴイルのコップを擦[illegible]てゐる。庚寅倶楽部の接[illegible]で、十疊ばかりの質素な西洋室である。

「可厭になつた譯じやないが、僕は先天的政治界の人でないといふことを自覺したからですよ。其に、こんな蹉跎を省ちや、何如ふ憂ふも沮喪して了はざるを得ない。況して僕の如きは、一箇薄志弱行の哀れむべき人間に過

跌

果

きないので、謂ひ天分が尊いのだから、事を志と違ふのは、敢て異しむに足らんですよ。」

と淋しく微笑んだのは、比も三十二三の男で、七子の五つ紋に、仙臺平の袴を著けた清癯の鶴の如き、背の高い、何となく斎峠ふ風骨である。顔は蒼白め、頭髪は頬に敬ひかゝり、頬髭は青々と、睫毛の長い、切の好い、窪んだ眼の光と相業して頗る沈鬱に見えるのであつた。

「それぢや君は、新しく再び政治界に立たん

叙

といふのか。」■と口髭は詰るやうに詰つた。

「いや、断じてとは請はんですよ。仕誰にしてつては再び諸君の驚尾に附して、何か一ト仕事やるかも知れんぐすが、當かのところ、まわ暫くお休みです。」※と口飲んで、帳然と身を反らした。

「然らは行かんよ。人は憂然う言ふがね、何太■も然らは行かんのだよ。」■と口髭は嘲むやうに言つて、此もビイルに咽喉を潤し■コップを差出した。

「野や山君一つ。」■

のは、四十五六の、疎髯禿頭、赭顔肥満の大漢子であつた。

「はあ頂戴します。」

「何ぢやね、人振でビイルの味は又格別ちやなどふ。」■と家のやうな目の縁に小皺を寄せる。

のであつて。

旨■いです。渇えてゐましたからな。其癖飲めんです。」■と■さらに、■今度は連と莨を吐す。旨

「むゝ然うかね。君は一体何を喜せられて■ね

た？」

「僕ですか。」

「傘の柄と蔓がたつていね。」馬鹿

「初■のうちは、■はたきつて、腹が立つて行れなかつたです。然し脱るべからざる運命だと思ふと、段々馴れて来るです。入牢中、格別得たところもないが、唯いくらか人間に落著か出来たのは、傘の柄を磨いたお蔭だらうと思ふです。僕の如き怪ふ人間には、監獄も薬ですよ。」と野や山春作は、鼻を聳して一笑する。

て一笑する。

七

「煩い世の中に、あつぷく苦しんでをらうふりか、其も鴨氣で可かちやから、癪が大層心配をしたが、憔悴した形迹もないやうぢや。何しろ愛めたいわ、いや過ぎてみれば、早いもので、安姿ぢや議會が三度開會して、一度衝突して、水閣が一度交迭したくらおのものぢや。はッは。」

と細い聲で笑つたが、

「也祖が奈何したの、滿洲問題が奈何したのと、やつてをるより、傘の

二

の柄を磨いてをる方が結句無事で可いのぢや。

私たんかも、近頃は其主義で、毎日裏の畑で蔬菜を摘つたり、胡瓜を作つたりしてをる。

悉皆田夫野人になつてゐるうちからに、再び議場に出やうとも思はんけりや、選擧場裡に

二

起たうとも思はん。」

「はふ、私も其胡瓜でも作らうと思ふですよ。」

と野々山は急に元氣らしく微笑んで、

「然して、勞苦功の鮮かつた前半生を葬つて、更に後半生の新しい希望を開拓しやうと思ふですよ。」

（？）君の過去の運動は何れの希望

一

ふですよ。」

一

ふですよ。」

「新しい希望が無かつたといふ譯ではなからう？」と口髭が突然喙を容れた。

「いや、希望が無かつた譯ではないですよ。時々希望を持つてゐたに相違ないでせうが、然し其が始終奈何も茫漠としてゐたです。左右確乎とした把持がなかつたです。回想してみると、三十年の經營、都て空中の樓閣で、此として一つ僕の歴史に光彩を添へるやうな事業がないですよ。僕は其の時々、或は[illegible]に觸れたやうな感が[illegible]て、一箇の計畫と企てる。其の時は[illegible]で熱病患者のやうな一種の赤誠を持つてゐる。坐と人の視目を引くことも出来るのです。友人から讃嘆される事もあつたですよ。事物を視る目が、餘りに淺膚に過ぎる所為か、或は忍耐力が所為か、行りかけた仕事が、何時も中途で可厭になつてるふ。取て成功が難しいと思ふ譯ぢやない。絶えず、撓ゆまざる努力を以て進行したならば、或は最初の計畫を實行し得たかも

全

踏然起つて、

熱烈な

四

知れないです。然し其が[illegible]何云ふものか、僕には勇氣を持續しきれない。持續しきれないのぢやない、僕には一事に熱中してゐる執着心よりか、更に或新しいものに向つて、歩武を轉ずやうといふ空想が起に立つて可けない。何、こんな事は、誰にも出来得る筈らん、といふ氣に成つてふ。そして、其新しい希望を見つけた時が、僕の最も愉快を感ずる時で、其實行に着手して中途に至ると、

全

で熱が冷めて引つて、直に興

味索然としてふ。だから僕、今や選擇場裡

五

（3）

？君の運動は何れの希望

（4）

（6）

（7）

熱烈な

「むゝ、如だね。」と口髭は不思議さうに野々山の顔を眺つて、

「さうすと、君は一種の氣弱れものかね。」

と艶を捻り乍、

「さう、氣弱れと謂はゞ氣弱れでせうな、然し僕は自負心が強い所為か、何をやつても相應に成功するやうな氣がする。だから色々な事を行りかけて見るが、さて徹底しないで多い所為か、其と雖も投機氣が行りかけて見るが、さて徹底しないで

す。或は宗教家に成損ねた事もありますよ。」

時と、しては經濟學社會學時、時としては哲學者史學家と謂つた風に、時々刻々氣が變るのですが……いや僕は何種の部門に向つて甚ですが……飽っぽいと謂へば、教育家に成らうとしても、自己一箇の見解は立てた意で、直に他の方面へ向つて去つてゐるのです。十四から書を出入して、業未だ成らんといふのは、恐く

法律思想も養つて見た事もあれば、教育家に成らうとした事もありますよ。

文學を覗いた事もあります。

味索然として了ふ。だから僕、今や選擇場裡に立つて、丸かすでは成功するといふ那の場合、言ふと過激に渡つて、端なく不敬罪に問はれた、自分の奇禍を、他で見るほどに、自分では深く後悔もしない、残念も念はないです、といふと、何か酷く悔つたやうに聞えるが、決して然云ふ意味ではないのです。」

唯漫然と後悔したやうに、根據がある譯ではないのです。」

其の問に何種の

芙蓉頃

僕のやうな成功を急ぐ青年には希しいことで、「いや、徒労とは謂へんぢやらう。今後の運用次第に依つては、何如ふる老紳士は大な平手で、顔も隈らん。」と赭顔の老紳士は大な平手で、顔を撫でながら、

「まあ、君が今後の方針に就いては、ゆるゆる御相談をする事として、左に在此すで漕ぎつけた政治舞臺を退くといふのも、驕躁といはに、君のために惜むべき事ぢや。驕下のため

べ謂ふべきぢやが、君の君に望を屬してをる。意氣天を衝く勢で、政界をゆつて廻る事ぢやら〳〵と待構へてをつたのぢや。甚が然云ふ氣のないことでは、試に早や心細い次第ぢや。」

「いや、諸君の御好意は感謝するのです。然し僕の行つて見れば行れん事も無いでせう。代議士くらゐが天分を以てすれば、仕事も出て来ちからうと思ふて山で

す。

「拾段目賢しい仕事も困難を極めてをるのです。」

何しろ僕も定めし出獄した曉は、

。

「何だか精力此に竭きたかの感もあるのですが、甚だ意氣地がないやうですけれど、僕は今暫く社會の舞臺を退いて、平和な生活を營んで見やうと思ふのです。地方に考へて見ると、中央の舞臺を退いて、後半生の生活の基礎を固める意で、諸君と相提携してからといふもの、不思議に諸君に買被られて、僕は或は實力以上の名譽を負つてをるではないかと疑ふのです。此が或は僕の成功なのかも解らん。僕の黄金時代である

「無論最初は時事問題であつたです。所が六箇月も經つと、そんな俗問題は誰らなくなつてしまつたです。先つ人生問題といつたやうなものが、那云ふ曖昧のところで、僕のやうな人間には起り易いものです。其に就いて、色々の疑問が附いて廻つたり、何かし此等の疑問を研究して、煩悶が一つ無論是までにも、度々そんな事を考へて居たです。

四

問題が起つたり、獄窓を出たら、直ぐ一種の宗教家に成つたのです。だから、僕これかて見やうと思つたです。

僕は政治には縁の無い人と成つたので、僕平素の持論であつた事を考へて居たです。

畢竟、今度のやうに痛切に感じた事はない。

當年懲役に立つて盛に、僕は成功の暁に、一種の宗教家に成つたと同時に、僕は成功の暁に、一種の社會主義を振廻して、臨檢の警部に「辯士！」と一喝されて、直ちに政治界から、田園に引籠つて、鋤を取つて荒れた畠を耕して、そして靜に自然の偉大な力を捜り、真理の源泉を汲んでみやうと思ふです。

本音を吐くと、實は僕も三十年来の數奇な

一

二

かも知れんです。然し僕は九三年のあいだ、獄窓でもつて、色々な問題に頭脳を悩ましたですよ。」

「どんな問題なので？」と口髭は氣の無い聞方をする。

六

五

か、理想と實際との矛盾を發見したり何かし

ある

、本音を吐くと、實は僕も三十年私の數奇な生活に疲れたからなので、少時の安息を得なければ、到底遣切れたものぢやない。僕は所詮社會を辞して、家庭の人と成らなくちやならないので……。」

「……其處に君の新希望もあらうと謂ふので？」と口髭は挑るやうに言つた。

「然うなんです。」と野々山は輕く受けて、ビイルに息を繼ぎたのから。

「いや留守中は、家内が色々諸君の御厄介になつて……。」

畢竟

預つたさうで……。殊に渡君には、一方ならぬ御厄介をかけたさうで……。」

「何有、お禮には及つて痛み入るですよ、お互だ。」と渡君は呼ばれた口髭の紳士は、清しい其目を耀して、事もたけに、更に、

後

「妻君が定めし悦ぶ事だらう。吾々は君自身よりか、寧ろ君の妻君のために同情を寄せたので、君が比れから、家庭の人と成つて、愛の露に、萎れかゝつた君の生命を噴起さう

とするのは、實は僕の最も喜ぶところなのだ。」と何者か微に眉根を曇せた。

「……僕も入獄以前は、情とか何とかいふ事には極めて冷淡であつたです。家庭なんていふものを、酷く安く見て居つたのです。殊に妻を娶つてから、僅か一年の日で、お互に未だ心の底を汲合つたといふ程ではない。最初は多少の愉快も感じたですが、半年も經つて見ると、互に欲點を探りもすれば、不滿足の點もある。

聚

約ず

臘けに描いてゐた夫婦觀や何

の聲を聞く時だ。一種言ふに言はれない、悽愴と哀愁とを感じて来ると同時に、無上に家

「はて、獄窓といふものは、無上に人の氣を弱くするものと見えるぢや。」と赭顔の前代漢士は不意に笑出した。

「實に家庭はかりぢやないですよ。」と野々山は極悪さうに苦笑をして、

「故郷の青山碧水、菜圃麦隴、何へは庭にある誘らん松の木一本でも、妙に可懐いやうな氣がするです。人窮すれば天に歸るとか謂ふのは、眞箇の事實で、あの境涯では始終邪様事でも夢に見てゐるのです。」

五

一

か、理想と實際との矛盾を發見したり、時とすると、時ですもがなと思ふ事もあつたですが、偖て寂寞中の人と成つて見ると、其美しさ溫かさが先づ染々感ぜられるです。落莫たる此の躯世に、家庭といふオシスがなかつたら、僕は生獄の愉快を、恁程に感じたのい

に相違ないですよ。」

ある

約

六

五

「む、、然うだらうよ。」

沮洳場裏の苦痛は、

支那の昔の白面見たやうな、痩我慢どころぢやあるまいよ。」と猛渡が思出したやうに、蔑を吃した。

「飲食衣服の事は、未だ然でもないが、躰の窮窟なくらゐ、不自由なものは無りは当んですよ。雨が降るにつけ、風が吹くにつけ、雪が降るにつけ、殊に冬厳なのは、しよ憶出すのは村の自然でほ〳〵雨の晩、蛙の聲を聞く時と、薄ら寒い秋雨の頃、

宋賢に出

二

の聲を聞く時だ。一種言ふに言はれない、悽愴と哀愁とを感じて来ると同時に、無上に家が恋しくなつて来る。寒のうちなんかは、真白い双のやうな風の筋が、夜の隙間から、骨を刺さうといふのだ。寳に堪つたものぢやないですよ。」

「……一つ君の健康を祝さう。」と獲渡は肅然として謂つた。

「そして早速歓迎會に臨むとするぢや。」

歓迎會は、歓、折角の御好意たすけれど、僕

寳は御免を蒙りたいので。」

「何者だ。」

「今申したとほり、政治とは絶縁の決心ですから、政社團体の仲間入は好ましからんのです。……」

「ぢや軍に友人として。……」

「吾輩の志を無にするのか、……準備もした事だ、強ち政黨絶縁の必要條件でも無あるまい。」

「けれど、宴會たんぞは、何とたのく厭はしい感がしますから。」

部屋の隅々はもう、幽暗く成つて居た。寒かから吹入る風に、紙の牡丹が一片、ぽたりと散つて、柔かふ匂が動とすると鼻を擽めてゐる。野々山は、や満面に酒氣を帶んで、目は燿き取れは熱して、拓れたんとした青年の血潮が、今一ぺ其渾身に涌き且つ流る、のであつた。

「先君の健康を祝さう。」

ビイルは盈々と注がれて、潮の如く、泡は捧ぐるエツプを溢るゝのであつた。

涙を流したやうな大空には、ぽつ〳〵星の

流墨を流したやうな大空には、ぽつ〳〵星の
加たのき瞬き、其が陰森とした枝木立の梢を漏
れて、樫の若葉に冷き光を流せて居る。田か
らは蛙の聲、山かゝりは山風の音、夜は深沈
として、村の灯が一つ二つ新樹の間からくれ
に蒼く、夜の濛露に包まれて居る。一面の麦
畑を前に、小高い杉木立の縁に跪坐んだの
は、色白の紺士と、小柄の少い女とである。
紺士は山高に黒の羽織、すゝ草の火影に照し
て看ると、其は擬ふ方なき渡順之介であつ

た。女は年の頃二十三四、柔かい絹もの〻袖に黒かしつた帶、頭髮はみだれ髮に、何か赤い手で絞を掛けて居る。目の[redacted]こしたところと、眉毛の濃いのが夜目にも著く見られるのであつた。渡

「ちや渡さん、春作は今晩歸らないでせうか。」と女は髮の毛を掻あげて、おど〳〵したやうな聲で言つた。

「然うさ、歸らないとも斷言は出來ないが、でも、今夜は晩くなるから、[redacted]小夜さんの實家で泊るとかいふ話だつた。無論私は八時半頃切揚げて來たのだ。早くとも十一時にはなるだらうから、其から二里の道といふと、些ど臆劫だね。第一醉潰れても居るし[redacted]……」

「さゝすと、怒しても居られませんわね。」

「然うでせうかね。」と力たく仕目にふつた。

「然し小夜さんの事を、非常に氣にしてゐたから、晩くなつても歸るかも知れないらしいのさ。」と悅けた調子で。

「然う？嘘！」とおぼ小夜は溜息を吐いて、

「さうすると、怎しても居られませんわね。」

「まあ陰難だね。」

「ぢや私帰りませうよ。」

「其の方が無事だね。」と氣のない返辞である。

外に、別に御用はないんですか。」とお小夜は

指揮をして下さらなくちや、困るわ。

「其は小夜さんの勝手さ。」

「ぢや帰つても可いんですか。」

「其ぢや困る■わ。貴■が居ろとか、帰れとか

上七

暗いのに、送つて戴かなくちや、私一歩だつて行かれは為ないわ。」と仇氣ない調子で、又跪坐んでゐるふのであつた。

猿渡は少時莫を吹して、黙つて居たが、

「……今頃は野々山が帰つて、血眼になつて小夜さんを捜して■るかも知れないよ。」

「嘘。帰らないと言つたぢやありませんか。」

と打消したが、「貴■つては、人が悪いよ。」と

又氣にふるらしく思案に沈んだ。

漸く吹添つた夜嵐は、麦畑に千傾の波を打た

せて、枚の森縁を続つてゐるかと思ふと、花

菜の匂が何處からか■と颯つて来る。

「帰らないと知つたら、何も急ぐにも及ばん

ぢやないか。」帰つたところで見つかる氣遣は

有りはせんよ。」

「だけど猿渡さん、」とお小夜は身を寄せて、

「私は奈何したら可いんですよ。」

「まあ〳〵当様がないんですよ。」

「もう可怕い？何が可怕いの？」

春作君が帰つたら

「可怕い？何が可怕い、今すぐと違って、神妙にして澄してみるあんの事ぢやたのいか。氣取られるやうな、間抜な真似をされちや、私も大に困る。春作君に對しても濟まない。氣の毒だ。濟んだ事は為方がないから、今後大に警戒して貰はなくちや

「そりや然うですけどね、私に地団駄踏んでおられさうもないんですよ。だから、可怕くてくて、顔を合すのが、もう死ぬより辛い

の。」と沈んだ調子で聲を曇せた。

「それは御同様さ。けれど、既に春作君が歸つたのだ。小夜さんは此方から幸福だ。最初は少々辛いだらうが、瀬を逃してなへば、初の譯のない話さ。其處へ來ると、女は女つて肝が太い。」

「あら、肝がいくらあつたつてば、氣の樂な事はかし言つてらつしやるよ。」

「なんかしや為ませんよ。貴方が餘り落着いて私は口惜いんですよ。」

「口惜いのなら、最初から口惜いのなら、最初から罪を作らん方が可い。」

「然ぢやないんですよ。貴方が餘り落着いて私は口惜いんですよ。」

「だけれど、驕いたところで、為方もないと。其れぢや罪を懺悔して、春作君に謝まるとしやうか。」

「談言つて在いよ。死んだつて、那樣事がまあ！」

「だから為方がないぢやないか。小夜さんは

宜しく春作君を大阪にして、大に罪を償ふ。

困る〳〵つて言ふけれど、困るのは初めから知れてる話だ。離縁になつても外はないて、立派に言つて癖に、今になつて死ぬの活きるのと、其ほど春作君に極が悪いのなら、

[redacted]縮震に打明けて離縁を貰つたら可いじやないか。」

「あら、貴[redacted]は直[redacted]……何だ。」

「直？直、[redacted]……。」

直惱つておるひなさるんですもの、私だつて

て困るちやありませんか。」

「だから、離縁を貰いたすへ。私も男子だ。

さが名譽もある男子だ。離縁を貰つた以上、

償闘して私はしたい。小夜さんの躰は立派に

始末をつけてお目にかける。」

「始末つて、奈何なさるの？」

「奈何するもんか、妻君にする。」

「そんな面當がましい……。」

「して見ると小夜さんは、天秤にかけりや、

春作君の方が重いんだね。」

「あら然うぢやありませんよ。然ぢや駄目せんけれど、那樣思つた事が……。」

「然うだらう。だから春作君が重いのだ。」

「歸つたと聞いて、急に後悔をしておるに違ひない。」

「……いや、悪かつたよ。」と獲渡は急に詫子

「……そ、そんな酷い。私や貴[redacted]に那樣事を

言はれちや真箇[redacted]ら堪らないわ。」とおふ夜は[redacted]

けた。

「……いや、悪かつたよ。」と猿渡は急に調子を和けて、

「私が悪かつたよ。何のね、[illegible]も行かない。然し夜さんの躰になつて見れば、春作君に受想が盡きたといふ譯でもなければ、ほとの人間でもないのだ。私が春作君に見換るほど、一時の氣紛で、春作君が歸れば、私は他に人の猿渡たんだ。」

「あり然言つた日にや、お互さまですわ。春

作が歸れば、貴[illegible]だつて、今のやうに邪慳な事を言ふなやありませんか。」

「だつてお夜さんの氣が、然うたんだもの。」

「何時私が邪樣氣なんでせう。其ところか、私や本當に辛い事がある[illegible]んですよ。」

「辛い事？」と猿渡は聞[illegible]める。

「だから貴下は人の氣も知らないで……。」

話聲が途切れると、暗連る時の聲が滿境の夜氣の氣に、一種荒涼の氣味を添へてゐる。空は奈何か雨になりさうな氣勢で。良久あつて、猿渡は投出すやうに、

「大何するね。」と怒を洩した。

「だから、貴[illegible]が、怎しろとか、邪しろとか言つて下さいな。」と帽を取出して涙けを[illegible]んだ。

「奈何も怎もない。是迄の事は秘密に葬[illegible]つて、腹の悪い話だが、平然としてゐるより外はないぢやないか。若また不幸にして、[illegible]れた場合には、私が引受ける、とまあ、しておくさ。」

其だけの事を確めておけば

而いのだ。」と猿渡は起[illegible]つて、

暴

而いのだ。」と猿渡は延ばして、

「ちゃ、其處まで送らう。」

「ばあ。」とお小夜も躰を延したが、

「私や何だか、家へ入るのが可厭な氣がして

為様がないんですよ。」と心細さうに呟いた。

（別カ）

お小夜は一体、町から野々山へ縁づいたので、

必ずしも不和といふではありつたが、春作

に對する愛情は、決して深いとは謂へなかつ

た。一つは春作が胸中に潜んだ、一種の濃ま

愛情を没知るだけの力がなかつた所為でもあ

る。

四

る。

を持つて居たからで。

は、這麽夫婦の愛情を堅めるには一年何ケ月といふ月日は

つたので、春作が入獄し来、留守を引受けた一種の浮いた空想

猿渡が風来と、如才のない仕向とは、容易に

其後久しい空想を弄び得たのであつた。春作は

春作と猿渡とは、ケチな男の女であつた。

野々山といふ豪農が、零落の運命の下に置れ

た薄倖の少年で、順之の父は比較的大地主の二

男である。

春作は慧敏な、勤勉な、

小

沈鬱な學生であつたが、

學問嫌いの、高慢な少年であつた。

其が二十歳の時分から、愈よ個々の本領を發

揮して、猿渡は其の私立學校に入つて、春作

が未だ一種の學を修め得ず、始終何等か幽

閉し、踏躇し、回顧し、冥想してゐる間に

孤く既に、髪を生して、ハイカラを著けて

、玉突や自轉車の通を言つて、ラブを說いて

居た。兄が死んでからは、財政を理する

を過いで、路に係り、

六

藝者を買ひ、茶屋酒を飲んで行くのである。

藝者を買ひ、茶屋酒を飲んで行くのである。

が、金の勢力に眩惑し、社交の脱も可なり利けるので、土地の有志間に侮るべからざる勢力を持つてゐる。

彼は無妻ではあかつた。幾ど三年前、家を嗣くと同時に、餘義ない事情から、隣村の豪農の娘を貰つたが、容貌も心意氣も、彼には老く不滿足であつた。

己に一二度離緣けたさへ起つたほとで、今猫夫婦間に、一點星の如き愛情をも認め得ぬのである。

順之介が家督相續の翌年であつた。山を拳ぢ、谷を渉り、から手を量らず、路の嶮夷を問はず、徒に精力を擲棄して、失敗の多きに驚いた者は、少時地方に生活の基礎を築く意で、不圖順之介が勢力を國内へ入つて来た。彼は破れた步はかりの田地を撿し、批けてあつた我家の雇を繕い、垣根を結へ、草を刈つて、此に憶れきつた身の安住とすべき境地を拓くと同時に、一面筆を揮ひ剣を舞して、多年の蓄積を傾倒した。

反響は意外に多かつたのか、彼は直に騎下の政界に、陰然たる一敵國を作つて、二年目の臨時總選擧には、有志から推されて競爭場裡に起つた。政見發表としての彼の演説は、始終物の影の如くであつた、彼が半生の行動に比べると、全く別人の如く、明晰で、そして又熱烈雄壮であつた。彼自身と雖も、恐く自家の分量以上に出た、此の成功を異みもし、驚きも当たであらう。

比にも彼を見遣さたけれと失敗てふ運命は、

かつた。彼の確報は其三分の一にして、端なく中止の厄運に會つた。

不敬罪！重禁錮！

かつた。彼の確信は其三分の一にして、端なく中止の厄運に會つた。不敬罪！重禁錮！——

彼は數多の政友に送られて、獄窓の人となつて以来三年、硬い布團に嗅い飯、粗末な夢暖かならぬ時は、數奇であつた過去三年の生活を奇しみ、隙間洩る風に骨身を刺されては、家を守る女房を思ふ事もあつたが、今や再び雲遠く水長き故郷の天地に、萎れ切つた躰を自然の搖籃に憩ふて、妻が愛の露に潤ふべき恵に會ふのである。

猿渡が春作を出るとき、春作が

頭脳に浮んだ村の自然の麗しさは、甚だ麗つたらう。家庭の楽しさ、妻の優しさは甚だ麗であつたらう。彼は信じてこそ、流れる文があると思つた。けれど、猿渡は彼の友人ではふく、そしておわ夜は、最早や彼の妻ではたらいのである。

猿渡が春作に對して、要意を持たぬと同時に、

おわ夜は今も春作が妻たるを事を信じて疑はぬ。彼女は猿渡の犬を思ふと同時に、陳は無かつた。一面悔の笑顔と聲とを交れる。

恨の情が劇しく身を責め呵むと同時に、寝の毒矢に射貫れた駒は、日と夜とたゝく夜となつて来たこの、猿渡自身の注進を聞いては、今夜や明方迄の苦のために苦くも悩まされて居た。

今更のやうに、目も眩き、眩も裂けんばかりの苦みであつたが、怨ても猶頑之外に逢ふ一刻の楽には、蜜の如く甘しと恥けるを禁じ得なかつた。

枝木之の蔭を離れた二人は、今棟の木と棟の植つた、一筋の細道へ出た。

お小夜家の

棟は、もう其處の木之陰から見られる。

「まあ、然うですか。歸つては為たいでせう。

「大丈夫歸つては為たいよ。」

「歸つてゐなければいいが、猫のこと、附合つて下さすつたつて、所いぢやありませんか。」

「ぢや、私と行かう。」

「歸つてゐたら？」

「はあ、歸つてゐたら、私や奈何するんです。」

「困つたね。度胸を据えて、ぐつと入るのさ。」

「何だ、もう十二時だ。」

言ふうちや、其門前に来た。樹や栄の大木が門内に枝を蔓らせてゐて、横手は陰惨としに藪畳の根、其にさわくと夜嵐が騒いで、満地の白椿が闇を脱いで、一面の文を描いて居る。只と見ると、板戸は直り締つたまゝで、上框に細看くしておいたランプの灯が一條、障間を漏れて居て、炬を取捲いて、竹を割くやうな蛙の聲、内は時計を引出して、透し見て、

「まあ、然うですか。歸つては為たいでせう。

「比べらすで遠つたら、もう有からう。」と猪渡は不圖立傳つた。

「後生だから、宅の前まで附いて来て下さいよ。其てたくちや、私は入る氣はしたいんでよ。」と顫へるやうに言つた。

「まあ、然らですか。歸っては割たいでせう」

「ねえ。ぢや私は歸らう。」と私と扱戸を引啓けた。

「まあ、ぢいぢや有ませんか。」とお小夜は引留

顔に猿渡を瞶めた。

「何かないさ。」と猿渡は拗ねる。

「ぢや私一人で入るんですか。」と低聲で言つたが、猿渡は二三歩行き出さうとして、空合を眺めて、

「ぢや、今夜は歸りはしないだらうけれど……」

「ぢや可いぢや有ませんか。」とお小夜も後を追けて二三歩行き出した。

「けれど、現に今日春作君に顔を合してみて見ると、遊がに全何も氣が引けるから……。」

「だけども、淡やお話をするのも、今夜限だと思ふと、私や何だか變な氣がしてならないんですよ。」

「もう話す事も無いぢやないか。」と猿渡は淋しく笑つた。

「何ですね、急に。だから貴方は依様薄情なんだわ。一時私をお賑りなすつたんだわ。」

と清しい目に可愛味を持つて来る。

「然云ふ譯ぢやないさ。」

「いゝえ、此度然なんですよ。」

「ぢや入らう。」と猿渡が引返さうとすると、

「お小夜は又対に返して、歸りや省ないでせうか。」

「何だ、人を莫迦にしてるぢやないか。だから依様春作君の方が良かなんだ。お夜さんの

氣は、私Tと知ってるよ。」

「然らぢやないんですけど、ひょっと歸られでもすると……。」

「歸るもんか、大丈夫だよ。歸れば歸つたで私にもすんだ法がある。」

「すんだ法つて、奈何なさるの。」と無意識に喧嘩腰に言つちまふ。」

「奈何するもんか、洗ひ浚ひ言つちまふ。」

「……貴方は何かの癖に言つちまふ。」

、那様無法な事が出て来るもんですか。」

「無論、お夜さんの氣が、然らぐらくして おるんぢや覺束ない。」

と挑るやうな目色をする。

「私だつて、然らなれば所いには所いんですけど……。」

「奈何だか解らないさ。」

「だけど、可成ならば言はないで下さいよ。」

「それは私だつて、言いたかないさ。けれど、仕方によつては、言はないとも限らない。

暗闇のふかで悪い事をしてるよりか、其方が

窓明が可いから。」

「そりや然ですけどね。」

「下さいよ。私や本當に辛い事があるんですから。」と心配相な目を振向た。

押問答をしてゐるうち、雨がぽつく降つて来たので、二人は内へ入らうとすると、上框の灯が、何時か消えて居た。

後生だから言はないで

雨は漸く虜くなつて来た。

猿渡は敵へ事實を

雨は漸く降くたつて来た。

春作に打明けやうと思ふのではなかつたが、お小夜の氣と引いて見たいのと、妙な好奇の感情から、[illegible]執固く其を主張するのであつた。お小夜は寧ろ、其を好まぬではない處か、此ヶ月以来、財の諸子が変にたつて、命何考へて見ても、猿渡に情の種子を宿したとしか思はれぬので、所詮包み[illegible]すべき望はない、と思つては居るものの、其を猿渡に打明けて引へば、氣早の

十一

猿渡は敢て事實を[illegible]

猿渡は[illegible]

彼は、直に春作に言つて引つぬらつて[illegible]。然し、直に春作に言つた瞬は、自分は春作に對し、實家の面紀に對し、二度と顔向もならぬほどの痛苦と刑罰と を受けねばならぬ。おお夜は事實流きてみる瀬もないのである。おお夜が幾度も「辛い事」と言つたのは其で、口もそれは出なかつた。相手の氣を測りかねては、言出し得ぬのであつた。

一時間ばかり話してあるうち、妙に二人の情が[illegible]れあひ、言葉が終りあらうに揚句、全何した

のか、猿渡は不図袂を押つて立去つて引つぬ。後にお小夜は突伏して直泣きに泣いてゐたが、其はもう一時半の頃で、雨が一時小通んで、下度春作が加歸つて来たのである。

お小夜は寧ろ裏から追はつて、出嗟の思案はして見たものゝ、やはり板戸の啓く音がして、春作の渡せた姿が、いきなり暗闇の中から現れた。醉醒まはの疑から顔は真蒼白で、きろりとした目の底に、[illegible]壊けた一種の

深い情を持つてゐる。

夜は目を引擦りたがる

深い静を持つてゐる。夜は目を引擦りながら、鬢の[illegible]れを搔[illegible]けて、遂に早く灯を細める時に起あがつて、うろ〳〵したなから、横と目時に、小くなつて坐つた。

「何したんだ。」と横目で見た。

奈「はい、いゝえ、今ちと〳〵微寝をしてゐつたのでございます。」

「お帰り遊ばせ、大層遅かつたや[illegible]ませんか。」

春作は可懷さうに四[illegible]を[illegible]した。

書齋に使つてゐた八畳で、床の掛軸から置物、書棚に机、堆く積んだ雑書も昔の儘で[illegible]ある。

床の壁が雨に剝れて、大振の花瓶に薄[illegible]の蹲踞が投込んである。彼が目に映つた妻の顔から様子は、想像したよりは、美しくも若くも見えるのであつた。頬は脹よかに、髪はつやゝかに、頸脚から鬢のあたり、全て湯色の海棠を見るかのやうに水際だつてみた。

春作はじろ〳〵と妻を見遣つて、

「私の帰るのが解つてゐたのか。」

「はい、それはもう、新聞や何かでなほしてと

りすましたけれど、」

「後渡君には、留守中色々お世話になつたらうね。」

「はい、隨分御深切に……。」と片手を畳に、俯きながら口籠つたが、氣を奮へて

「何ぞ召食りませんか。」

「いや、何にも慾しくはない。茶でも貰れてもらはう。」

「然やうでございますか。」とおホ夜は起つて、温んでゐた湯を沸しかけた。

「後渡の妻君が、大層[illegible]切にしてくれたとい

「後渡の妻君が、大層[redacted]切にしてくれたといふが、然うか。」

「はい。もう一方ならんお世話になったのでございます。善くお二人でお出下さいます。善くお二人でお出下さいます。」

かなすつて、夜は又作男を泊りに寄越して下さいますつたのでございます。去年の秋頃までは、賓客の父か母が、大抵来てゐてくれましたけれど、段々慣れて[redacted]り、

[illegible]が行つたりしましたけれども、一向家[illegible]いとも思はなくなつたものですから……

と切に上のゐど

カニ

したながら、火を吹つけてゐる。

「つられ方ゃ世話になつた事だらう。」と春作は組織を取つてゐるりと横に成りたながら、

「あゞ、辛と活かへつたやうな心持がする。

——是から一つ、健康を回復せんけりやならんが、何だか獄中で色々考へてゐた事が、歸つて来ると、ぼうつとしてゐつて、何から手をつけて所いのか、頓と解らなくなつた。」と

太息を洩して、

「然うでせうとも。でも、其ほどにもお窶れ

カニ

なさらないやうで御座いますよ。」と世辭笑をした。

「然かね。何でも明日から、人間並の飯を喰ふのが楽みだ。考へて見ると、美く辛抱が出来たものだ。」

と其から、少時監獄の話をしてゐるうち、夜は茶を持つて来る。お婆は もう乾いてゐたが、瞼が紅く、鬢の毛が耳元にへばりついて居た。

春作は半分身を起して、茶を啜りながら

カニ

「私も今度は懲々したから、政治は斷然休す

「私も今度は懲りましたから、政治は断然休す。そして百姓に成つてゐる。」

「お百姓ですか。」とおやま夜は寂しく笑つて、

「それも可らうございますね。」

「お前も其意で、今迄と違つて、白粉や紅は休して、眼半でも著けて、野良仕事でもする氣になつて貰はなくちやならん。」

「えゝ私の事ならミ……。」と言つたが、何となく謝子か乗つて来ぬ。

「人の為に、骨を折つてあるのは、實に愚だ

せられて、實に恩の極だ。まれて空ッ腹は以て喰い飲と喰はせられて、牢のふかへ投じて、程例巧だ。其でなければ、牧蓄でも作つて、盛に家や牛を蕃殖させる。幸いしばかりの畑地は有るし、資本は猥褻が心配してくれるたら〳〵から、早速一つ著手しやうと思ふ。お前も其氣になつて、牧畜の世話ぐらゐ為てくれなくちやならんよ。」

「枕ですか。」と何か考へてゐたおやま夜が、ど

きまぎする。

「いや。だけどお前には出来さうもないな。

まあ、其意でゐて貰へば可いのだ。」

「ほゝ、可らございます。」

「そして、私は静に本を讀む。少時世間と一切の依縁を絶つて、清淨質素の生活を營らう。いふのだ。樣が変すれば、氣の向き次第、或は世の中へ出るかも解らんが、當分のうち、まあ、やさもく、寛せるのは休す意だ。」

「然うですか。」

「……お前は冷だな。」と春作は、おやま夜に

自然お堅くて、[illegible]でせうよ。」

彼岸

「然う、お前なんかは、[illegible]

十三

「……お前は冷[illegible]法だな。」と春作は、おふくろを見つて呟いた。

遺也

「後渡君と妻君の折合は、此頃[illegible]何だ。」

「え、後渡さんですか。」とおふくろは怪しさを目を丸くして、

「然うですね、何ですか、私には美く解りません。」

「然うですね。」とおふくろは首を傾げたが、

「でも一と頃は、隨分お仲が悪かつたやうでせんけれど、今ぢや那樣でないやうですから、

「其は然う[illegible]だ、ぢや、餘り深く氣も割ないだらう。」

「私？いゝえ、然うぢや有ませんけれど、何ですか、頭痛がして可けませんから……。」

寢

蜂谷

と、急に嘯唱のところを揉みたから、

「寢冷をしたんでせうよ。」

「其なら仔細はないが、何だか濟ちん顏をしてゐるやうに思ふから。」

「那樣事は無いでせう。」とおふくろは笑顏を作つた。

「ぢや、私の氣の所爲だらう。」と春作は事もなげに一笑に附して、

十二

自然お堅くてせうよ。」

「然し、あの妻君も幸福だ。お前たんかは、結婚して一年経つか経たぬに、這麼災難に遭つて、家には資産はなし、私は餘り外はない分だし、實は氣の毒だ。」

「……まあ、取人の事を、貴！」とおお夜は急に胸が迫つて来たので、心苦しさうに呟いて、ほろりと泣るのであつた。

「それじゃあ方針を一變して、家庭といふものに十分趣味を持つて、今少し無邪氣に、面

自く日を送る事にしやう。

災難だが、是迄の歴史が何を行つても此一つ意を得たといふものはないのだ。三十年といふ長の月日、下らん事に精を出して、金を作るでもなければ、地位を得るでもなければ、漸く少しばかり餘つて、飄然と村へ歸つて、成切しかけたかと思ふと、這麼不幸だ。何をするのも可厭になつたのだ。何云ふ安穏も無くなつたやうなものし、、、

若葉、青梅の梢、其が囁き合ひでもするやうな

悪石の右左、苟藁の乱れふのが

春作は床を離れて、縁へ立出でた。板戸を繰り

啓けると、手洗鉢の横の袖垣に、行春の名残

を留めた山吹の移ろひ、其が三尼四尼馬蘭

の葉に散りかゝつて、青々とした楓が、今朝

の雨さへ乾きかねて、ひや〳〵と朝風に戦ぎ

、流るゝやうな影を地上に投げてゐる。空は

ところ〴〵白雲を漂せて、さながら碧水の澄

んだやう、日の光は懸々として、雲雀の聲が

雲から雲、野から野へと擴つて居る。水の温

人だ池の汀には幾株かの白躑躅、丘には櫻の

十四

不愉快な監獄の夢は破れて、春作のふと目を覺したのは、六時の頃で、四角な板戸の隙間を洩る日は、枕頭に差込んで、其にも新生活の望が充満ちてゐる。

あゝ、楽しき我家！豊ち我村！彼は今三十年の勞苦を遺れて、新たなる我せの幸を感謝するのであつた。

おゝ夜はと明るると、ぱや起て出たのか、帶も衣も見えない。不思議なのは、堂所の閾とした事で。

身を延して、冷めた茶を飲みながら、

「あゝ、今夜から手足を伸して、ゆつくり寝られるのだ。金何だ、話は又豊翔にしやう。」

と其からの、物語には、村の誰彼の消息、畑の作物の話、庭の栗柿の去年の實の出来栄、養蚕の模様、花苗の生立、話が其から其へと枝を打つのであつたが、全く寝静つたのは、二番鶏が啼く頃でもあつたらう。

若葉、青梅の梢、其が曝き、合しでもするやうに、ちらく〳〵と日に揺しかけてゐるのさへ、目も覺むるばかり、晴やくして孤る。

春作は蔓にマツヤを摺つて、物珍しげに築山の四辺を行き出した。

「おゝ夜は奈何したらう。」と疑つたが、今朝の祝酒の者と謂へるため、朝から家を出たのであらうと、彼は自ら慰めてゐた。

其處には昔

二戸前の蔵があつたといふが、一つは春作が幼少の時、一つは彼の昔に記憶してゐる。

春作は蔓を吐き出し、朝の風に吹れて、野菜畑の畝を縫ひつゝ、久しく憧れてゐた、野は萋々とした麦畑、空豆や豌豆の芽を見舞はう、故村の自然を、朝の霧に包まれてゐる。

川は谷の一面に青柳の、遠く晴れきらぬ陽かゝ、比さと泥田に馬を比る聲、と思ふと畠の蔭かゝ、ぽかりと

渦を捲いて昇る蔓の煙が、蔓く一抹の雲霧を戦いてゐる。

村は山懐にあるので、西は遠に松山と杉木立に蔽はれて、祝には桑の畠、其に聯る蔓の麦の花、梨の花はもう雨に洗れてゐた。春作は不意と足を迅めて、其山蔭を目ざして、行き出した。其は山の頂にある小な池を捲出した半町ばかりの池で。

夏の頃は美く蓴菜を採りに出かけるのであつたが、清に森々と生繁つたのは枝の大木、山

は浅いながらに、絶寂の氣は、白晝といへども、膚に栗を生ずるくらゐ。沈鬱な彼は、憂

論花い女であつた。春作は思はゞ顧みあがつ

た。

彼は風塵に埋れた三十年来の汚と流と、一時に雪ぐかの感がして、[illegible]く水に對して立盡すのであつた。と、蒲公英工筆の芝生を見ると、其處に脱き棄てた、藤の置に七輪の緒のすが

つた、女の下駄か目に着いた。絲

姑十五

春作は輕い驚に胸を轟せたが、更に池の向岸を透して見ると、一株の漆の木の、水面に茗葉の枝を擡げたあたり、何か白いものが浮んでゐる。白雲の影かと看ると、連に捺らるゝ黒髪、蒼い木葉よ蔽はれた白い脛、死骸は無

耽つてゐた一種の逸趣と嘆息し、有ゆる附近の自然を思詩ゝ、そして夢うつゝ淡い昔の己が樂園を辿るのであつた。池は彼に取つては恐く人の知らない趣味があるので、蒼穹を敲ふやうな枝り森は、水も斧を入れ

にあつた。自分の腰かけてゐた石も、昔たがらに茫然してゐる。ふと移れる立の蔭から、紙の碧の水面を望み得た春作は、愕然として、言ふべからざる悽愴の感に打たれると同時に、

歴々と目に浮ぶ幼時の幻影を偲ぶのであつた。

は淡いたがらに、逸寂の氣は、白晝といへども、屑に冥を生ずるくらゐ。池鬱な彼は、屢此に人を避けて、少年の空想に耽つてゐたが、甚蒼々とした、凄い紺碧の水に臨むこと、如何ゐ愁のある時でも、彼は妙に胸のすがくしくなるのを覺えるのであつた。

失意のとき、憂のあるとき、悶のあるとき、今

も彼はをり碧潭のやうな、其水を想出すと同時に、幼時の歴史を想出し、森の緑に跪坐んで、默想に

論若い女であった。春作は思はず顔しかめつ

七時半頃の日は、早や枝の梢を洩れて、水に

寂しい一条の光を投げて居る。風は冷たく汗

ばんだ肌を撫めて、とぼ〳〵と森を出た春作

は、渾身の血が凍つてゐひはせぬかと疑つた。

初夏の生氣に充満ちた、朝間の野原、甚も似

が目には一切、暗を辿る心地で、かゝなく縁側に

身を投げると、甚すゝ双手で頭を抱へたきり

石のやうに成つて居た。

「野の小山君！」

いさゝか耳元に落つる聲なので、不意に目を

睜いて見ると、甚は寢渡順之介であつた。

「奈何したのだ。顔が真蒼だ。」白

「いや奈何も失敬。」と春作は起つて、漸

く會釋をする。

「え、奈何したのだ。大層顔色が悪いよ。」

「奈何も為んか、妻が……。」と、ほろり

と涙を落した。

「妻？妻君か奈何した。」と順之介は怪しく顰

聲で聞いた。

「死んだよ。入水したよ。」

「何、入水？！死んだの！」と春作は蒼くなつた。

「し、して何處で死んだ？」見るく

「無論池さ。」

「池で。む、何時だ。」

「君は、何故妻の叔家を知りはしませんか。」

と春作は順之介を打つた。

「僕は死の原因を解するに苦しむ。」

「知らない。無論知らない。何為だ。」

「そ、そんな事を僕が知るもんか。」と言ひつ

て、苦笑をした。

「そ、そんな事を僕が知るもんか。」と言いかつて、苦笑をした。

春作は此の瞬間、脳に或るものゝ閃きを感じた。同時に懐疑として、懐れ戰いた。順之介は氣を急いて、

「其が事實ならば、色から至急手傷を寄越さう。そして左に右、其の節への手續をしなくちやならん。」

けれど、春作は黙然として身動もしなかつた。順之介は言い

ちや、僕は引返すとしやう。」と順之介は言

葉すてゝ、しく辭し去つた。春作は、彼が支

誰を疑ふと、齊しく、呼返して詰問しやうと思

つたが、偖て其の勇氣がなかつた。

おわさ夜の死體は直に姓名と知れた。春作は順

之介に會ふ、ごとに、其の罪を問はうとしながら

、毎も然あらぬ体に粧はずには居られなかつ

た。彼は自身の氣弱さを、此の時くらゐ深く覺

つた事は無かつた。否、

春作は程無く家屋敷の畑と愛つて、顯然ばら

を離し去つた。彼は今、何處如何なるところ

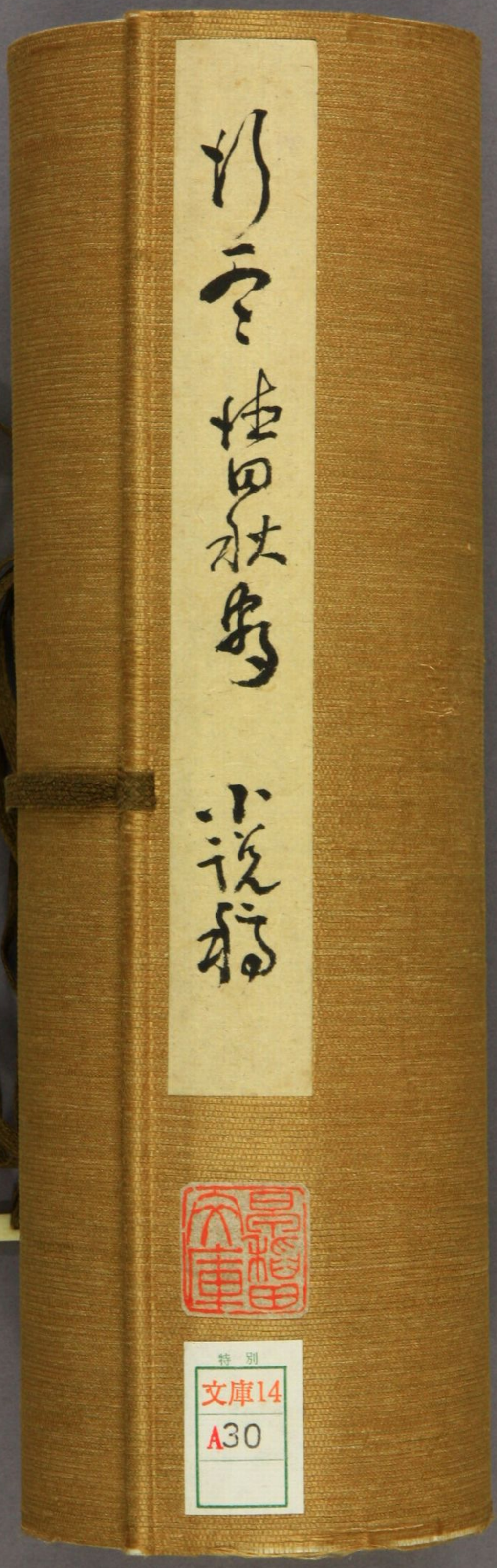
、如何なる新希望を追ふて行くのであらう。

（完）

辭して、しく辭し去つた。春作は、彼が支
誼を疑ふと、齊しく、呼び迫して詰問しやうと思
つたが、偖て其勇氣がなかつた。
おわさ夜の死骸は直に姓娘と知れた。春作は嘔
之に金ふでとに、其罪を問はうとしながら
、毫も然あらぬ体に粧はずに居られなかつ
た。彼は自身の氣弱さを、此時くらゐ深く覺
つた事は無かつた。否、
春作は程無く家屋敷と畑とを辭し去つた。彼は今、何處へ如何なる
ところ

如何なる新希望を追ふて行くのであらう。

（完）


特別
文庫14
A30

特別
文庫14
A30
53 1575

明治三十六年六月十五日付同十五日
号「二六新報」に掲載、掲載
面として送付されたる秋
声徳毋吉氏の書簡より

文庫四代記

原稿

著續明治文學史下卷所收

六十二頁八月

小林龍月